



Title	近世武家社会における名物茶碗とその「写し」：徳川美術館蔵「三島茶碗 銘 藤袴」とその「写し」を例に
Author(s)	原田, 直輝
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 43-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91180
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近世武家社会における名物茶碗とその「写し」

－徳川美術館蔵「三島茶碗 銘 藤袴」とその「写し」を例に－

日本東洋美術史 博士前期課程2年

原田 直輝

はじめに

「写し」とは、基準となる美術工芸品の形状や模様・図柄を模倣して造られた作品のことである。写しの元となった基準作品は、和歌の本歌取りにならない「本歌」と呼ばれる。

前近代における「写し」は、作品のオリジナリティが重視される傾向にある現代とは大きく異なり、本歌に準ずる価値を持つものとして評価されていた。したがって、「写し」の制作実態やその受容の様相について検討を行うことは、本歌単体を対象とするだけでは捉えられない作品の社会的意義の検討につながる。

本発表では、そのような「写し」のあり方を前提として、徳川美術館蔵「三島茶碗¹ 銘 藤袴」（以下、「藤袴」）に注目する。「藤袴」は14～15世紀頃に朝鮮半島で制作された高麗茶碗の一種で、遅くとも桃山時代には日本に伝来したとみなせ、以後大名茶の湯の世界で高く評価されてきた。「藤袴」は、江戸時代初期には尾張徳川家に伝わったことが確認できるが、江戸時代中期以降は公的な使用記録がほぼ見られなくなるため、その賞翫のあり方は捉えにくい。しかし、明確に「藤袴」を写したとみられる「写し」（以下、「藤袴写」）が複数点存在し、また「写し」の制作・受容に関する一定数の資料が残っている。それらを活用することで、本歌と「写し」双方の受容の実態に迫ることがある程度可能となる特筆すべき例である。

本研究では、近世における「藤袴」の賞翫のあり方を考えるにあたって、その「写し」に注目する。「藤袴」本歌の関連資料についてまとめた上で、発表者は先行研究に加え現在確認できている「藤袴写」の実作例をまとめる。その後、先行研究では指摘されていない尾張徳川家所蔵の三島作品の「写し」（以下、「三島写」）の下賜の記録について整理したのち、宝暦～安永年間の道具帳とされる『江戸藩邸御道具帳』（徳川美術館蔵）における記録に着目し、名品の「写し」制作の開始とその背景について私見を述べる。

1 「藤袴」について－基礎情報と資料

「藤袴」は朝鮮王朝時代に制作されたとされる高麗茶碗である。織田有楽斎（1547～1622）

¹ 近代以降、その造形から「狂言袴茶碗」と分類される場合が多いが、本発表では「三島茶碗」と呼ばれた近世における受容を検討するため、「三島茶碗」の呼称を取ることとする。

が所持した茶碗で、尾張徳川家初代・義直（1601~50）へと贈られ、尾張徳川家に伝来した。

その後の使用に関する重要な資料は、寛永13年（1636）の徳川3代将軍・家光（1604~51）の御成記録²において、鎖の間に家光を招いた際に使用した記録である。しかし、家光の御成以降、「藤袴」の公的な場面における使用記録は確認できない。「藤袴」に限らず尾張徳川家の名物道具は、御成の変容、ひいては大名茶の湯の衰退に伴って、秘蔵される傾向にあったと考えられている。

名物記を見ると、17世紀に編まれた『玩貨名物記』を端緒とし、以降の名物記やその他幕府・尾張藩の道具帳などに記述が見られる。しかし、いずれも分類（三島茶碗）、伝来（織田有楽斎所持）や銘（藤袴）、所蔵先（尾張徳川家）などの記載にとどまり、それ以上の情報は記されない。

以上、御成での使用と江戸時代中後期における公的な使用記録の減少、名物記・道具帳などの記載を確認した。「藤袴」本歌について記される資料は、現状では以上にとどまり、江戸時代を通じた「藤袴」のあり方はまだまだ不明瞭な点が多いと言える。

2-A 「藤袴写」制作に関する先行研究

「藤袴写」は、尾張徳川家の御用を務めた御用窯・御深井窯において、一定数制作されたことが先行研究および諸記録から読み取れる。御深井窯は、名古屋城・御深井丸の庭園の一角に設けられた窯であり、瀬戸の陶工・加藤唐三郎らによる指導のもと、江戸時代を通じて多様な製品を制作した。「藤袴写」並びに尾張徳川家所蔵の名品の「写し」については、仲野泰裕氏の研究³に詳しい。

仲野氏は、尾張藩の御用窯として御深井窯を取り上げ、その創始から生産、窯構造等についてまとめている。その中で、御用を務める御窯屋・加藤唐三郎家の文書⁴を中心として、尾張徳川家所蔵の三島作品を本歌とした「三島写」の制作について言及する。

仲野氏は御深井窯における「写し」制作は藩士・御用達町人への下賜品が主な用途であると指摘した。18世紀半ば以来の苦しい財政状況の中、藩士に対しては論功行賞的な役割を、町人に対しては苦しい財政状況の中で藩への集金効果を高める役割を果たしたと指摘する。

仲野氏の論文では、記録における記述を対象とし、具体的な作例については触れておらず、また史料の少なさから具体的な流通・活用について裏付けることは難しいとする。

2-B 「藤袴写」の作例

現在のところ確認できている「藤袴写」の作例は3点である。いずれも御深井窯での生産を示す「深井製」円印、そして功績をたたえての下賜品であることを示す「賞賜」円印

² 『事蹟録 第三八冊』（宝暦13年（1763）序、徳川林政史研究所蔵）による。

³ 『江戸時代を彩る 御庭焼と御用窯の世界』（愛知県陶磁資料館、1991）、仲野泰裕「尾張藩の御庭焼と御窯屋」（『愛知県陶磁資料館研究紀要』12、愛知県陶磁資料館、1993）。

⁴ 瀬戸市史編纂委員会編『瀬戸市近世文書集 第三集』瀬戸市、1992。

が捺される。加藤唐三郎家文書には、「写し」制作に際し「藤袴」をはじめとする尾張徳川家所蔵の道具をスケッチした図面『三島茶碗等見取図⁵⁾』（～宝暦5年（1755））が残されており、いずれの「藤袴写」も器形や文様の配置、見込み内部の篋抑え痕の表現に至るまで「藤袴」の見取図に記された特徴を高い精度で写している。

江戸時代初期から各地の窯で制作される高麗茶碗の「写し」の多くは、「井戸」や「三島」といった高麗茶碗の分類に即して制作され、しばしばモデルとなる一碗一碗の造形的な特徴は捨象される。そのため、本歌となる茶碗の種類は明確であるものの、特定の一碗を想起させるに至るものは少ない。しかし、今回確認する「藤袴写」の作例はいずれも細部まで写し切り、一目して本歌となる一碗がわかるという点で貴重な作例である。

2-C 「三島写」の受容－尾張藩の記録

「三島写」の武家への下賜にまつわる記録は、仲野氏の研究においては『御庭本業焼御注文帳⁶⁾』（弘化4年（1847））において、奥向に仕える武士たちが「三島写」作品群を願い出た様子が指摘される。加えて、幕末～明治初期にかけての尾張藩の道具帳においても「三島写」作品群が記録され、それぞれ藩士への下賜や、藩士の所持が認められる。

藩の道具帳に記される「三島写」の作例は、いずれも下賜品、あるいは臣下にあたる人物が所持している状態であったとみなして良い。

2-D 「写し」制作の背景－『江戸藩邸御道具帳』の記録

尾張藩の道具帳『江戸藩邸御道具帳』（『御側ヨリ請取候御茶器御道具帳江戸藩邸扣』）には、「御好巳年出来（茶碗）/藤袴写御深井製」の記載が見られる⁷⁾。制作年（「巳年」）については不明であるが、この記述からは、「藤袴」ないし「藤袴写」が当時の藩主の「好み」であり、「藤袴写」が江戸藩邸に所蔵されていたことが窺える。

仲野氏の先行研究では、尾張徳川家『御茶器御道具帳』内、寛政2年（1790）製とされる「御深井焼二口御茶碗」を実際に焼かれた「写し」作例の記録として最も古いものと述べている。『江戸藩邸御道具帳』については、仲野氏の研究の時点では年代についての言及はなく、年代不明という状況であった。

しかし、長久智子氏は注記等の表記から、本道具帳は宝暦元年（1751）～安永年間（1772～81）初期の記録であることを想定している⁸⁾。これを踏まえると、本資料所載の「藤袴写」は、寛政2年より遡っての制作となり、御深井窯において名品の「写し」が実

⁵⁾ 加藤唐三郎家文書。前掲注4所載。

⁶⁾ 加藤唐三郎家文書。前掲注4所載。

⁷⁾ 大河内定夫「尾張徳川家 旧藩古帳にみられる瀬戸焼の記録」『金鯢叢書』第二輯、1975。

⁸⁾ 長久智子「総論 尾張徳川家伝来の陶磁器」『殿さまとやきもの－尾張徳川家の名品－』徳川美術館、2019。

際に焼かれた記録としては現状最古の例となる。この場合、「写し」制作において参照したと考えられる宝暦5年（1755）を下限とする『三島茶碗等見取図』との年代的な乖離が少なくなる。

この宝暦～安永年間は、天候不良や災害が続き尾張藩の米納が減り、毎年のように財政が逼迫した状態にあった。仲野氏の先行研究では、名品の「写し」の制作及び下賜は尾張藩の財政難と密接に結びついているとの言及があるが、先述の通り『三島茶碗等見取図』と『御茶器御道具帳』の年代の乖離もあり、詳細については述べられていない。『江戸藩邸御道具帳』が宝暦～安永年間の記録であれば、名品の「写し」制作と藩の財政難はさらに密接に結びつく。加えて、御深井窯に関わった陶工も関与したことがわかっている瀬戸における「桃山陶写し」（織部など、桃山時代の美濃焼の「写し」）生産も、18世紀半ば以降、生産量が大きく増加することがわかっており⁹、18世紀半ばは御深井窯にとどまらず、広く尾張・瀬戸における「写し」の制作を考える上でも重要な時期であると思われる。今後は、この時期を中心に、名品の「写し」に関する資料を探し、その興り・背景についてもさらに検討を進めたい。

おわりに

本発表では、「藤袴」の受容について考える上で、「写し」の制作・受容を含めた多角的な視点から検討を行った。

江戸時代の幕藩体制が安定すると、室町～安土桃山時代に見られる戦乱に付随する大名間の茶道具の移動や贈与が少なくなり、特に大名家の所蔵する名品茶道具はコレクションとして固定化される傾向にある。17世紀初頭の御成を最後に、公的な場面での使用記録が見られなくなる尾張徳川家の名物茶碗は、秘蔵される傾向にあったことが先行研究において述べられるが、茶会記などの記録がなければ、具体的にどのような形で賞翫・所蔵されていたのかを探ることは難しい。しかし、「藤袴」を含む尾張徳川家の名品群は、「写し」の制作実態や受容の様相を通じ、名品としての権威が保たれていたことや、「写し」制作のための実見・観察がなされたことなどが読み取れる。

さらに、「写し」の制作背景として、『江戸藩邸御道具帳』の年代に着目し、先行研究で指摘されていた尾張藩の財政難や、瀬戸における「桃山陶写し」の制作がより同時代的に関連する可能性が高いことを指摘した。財政難に際して名品の権威を利用し、「複製されうる名物」として「写し」を論功行賞等に活用している点は、大窯業地・瀬戸と深い関係を持つ尾張藩ならではの傾向であろう。

今後は、尾張徳川家の名品の「写し」、ひいては尾張・瀬戸を中心とした「写し」制作とそれらの受容・流通に関する資料を探し、その実態をより具体的に捉えることを目指したい。また、尾張藩における使用・所蔵の記録についても引き続き検討し、江戸時代の大名家のコレクションのあり方や、名物茶碗の受容について考えを深めたい。

⁹ 土岐市美濃陶磁歴史館『瀬戸の本業焼－桃山陶写しを中心に－』2009。